

# 7月・8月の管理ポイント

今年は異例の早さで梅雨が明け、早い地域では6月中に夏シーズンに突入しました。高温、水、乾燥、高湿度、強光… 様々なストレスを抱えるベントグラスにとって厳しい時期です。ストレス対策をしっかりと行い、夏を乗り切りましょう。



高温ストレスから  
ベントを守る

## ヒートファイター

ヒートファイターは、夏の厳しい暑さをベントグラスが生き延びる為のお勧め資材です。有効成分「ゼルンボン」が細胞を刺激することで植物自体が持つ高温耐性が活性化、通常では弱体化・致死してしまう程の高温でも生き延びられるようになります。梅雨明け前からの予防処理で、ヒートファイターの効果を最大限得られます。

使用量：0.5ml/m<sup>2</sup> 散布水量：100-500ml/m<sup>2</sup> 散布間隔：14日

強光ストレス予防

## インターセプト

梅雨が明けると一気に日差しが強くなります。ベントグラスにとって強すぎる太陽光は強光ストレスを引き起こす原因となります（過剰に取り入れた光により活性酸素が発生し細胞が傷つけられる）。インターセプト処理で、強すぎる光（ベントグラスが吸収する波長の可視光、紫外線）をカットし、強光ストレスを軽減しましょう。

使用量：1000-2500倍 散布水量：100-500ml/m<sup>2</sup> 散布間隔：7-10日

根の生育しやすい  
土壌環境を整えましょう

## レボ

夏は台風やゲリラ豪雨などの短時間で大量の降雨が予想されます。レボは排水性が高く表層土壌の水分値を低めに保つため、過湿状態になりがちな梅雨時期にも気相をしっかりと保ちます。定期散布を行い根の生育しやすい土壌環境を整えましょう。土壌水分を高めに保ちたい場合はプライマーセレクト、発生したドライスポットの治療にはアクアダクトをご使用下さい。液肥などとのタンクミックスにはグリーンシナジーがおすすめです。

使用量：2ml/m<sup>2</sup>/月 散布水量：200ml~500ml/m<sup>2</sup> 散布回数：1ヶ月に1回~2回

スポット処理に最適

## ハイドレーターG

乾燥が気になる箇所に手軽に処理できる、粒剤タイプの界面活性剤資材です。ドライスポットの予防と治療にご使用ください。降雨前に散布し、後散水の手間を省く省力散布がおすすめです。1mm程度の粒剤なので散布しやすく、5mm程度の散水で溶けます。張芝した箇所の乾燥対策にも効果的です。花壇や鉢植えにもご使用頂けます。

グリーン・ティー 使用量：ドライスポットの治療 20g/m<sup>2</sup>/週 予防10g/m<sup>2</sup>/月

バンカー周り・クラブハウス周辺の芝地等 使用量：10g/m<sup>2</sup>/月

花壇・鉢植え・プランター 使用量：約10Lのプランターに小さじ1/2/月

サッチの除去  
土壌環境の健全化

## サッチクリーナー

サッチ成分のセルロース・ヘミセルロースを分解する酵素を主成分とした、酵素タイプのサッチ分解剤です。酵素そのものを散布するため即効性に優れており、サッチ分解量をコントロールすることが可能です。液剤であるため取扱いやすく、フィルターに詰まりません。農薬との混用や近接散布も可能です。梅雨入りまでに土壌の透水性や通気性を改善しましょう。土壌微生物のが活発な時期なので、微生物タイプのサッチ分解剤「サッチ・マネージャー」もおすすめです。使用量：グリーン0.2ml/m<sup>2</sup> ラフ・FW・Tee0.1-0.2ml/m<sup>2</sup> 散布水量0.2-0.5l/m<sup>2</sup>

土壌中の有害物質除去

## 光合成細菌

過湿状態の土壌中に発生しやすい硫化水素やメルカプタンなどは、イヤな臭いがするだけでなく根を痛めます。光合成細菌を処理して有害物質を除去しましょう。光合成細菌は硫化水素などを分解するだけでなく、他の有用微生物の餌となるアミノ酸やATP、ADP（高エネルギーリン酸化合物：補酵素）などを分泌し、有用な土壌微生物の住みやすい環境を作ります。サッチ分解剤と組み合わせると、サッチを効率よく分解できます。

使用量：1~2ml 1l/m<sup>2</sup>散布 月1~2回

害虫の発生に  
あわせて散布

## スティンガーフロアブル

7月8月は、スジキリヨトウ、シバツトガ、タマナヤガの重要な防除シーズンです。特に鱗翅目害虫は発生ピークが長く、数種類で混在して芝生を食害するので、殺虫剤のローテーション散布が必要です。スティンガーフロアブルは耐雨性が高くグリーンで1ヵ月、ラフFWで2ヶ月以上の効果が期待できるので、ローテーション散布の基幹剤としてご使用いただけます。

使用量：スジキリヨトウ 0.035ml/m<sup>2</sup> シバツトガ タマナヤガ 0.05ml/m<sup>2</sup> 散布水量：50-500ml/m<sup>2</sup> 使用時期：発生初期

日焼け止め剤や芝用強光カット剤といえば、“紫外線を防ぐもの”という印象がありませんか？  
実はヒトは“紫外線”、植物は“可視光線”と、防ぎたい光の波長が異なります。

ヒトの場合

波長290-400nm

紫外線を防ぎたい

紫外線を浴びすぎると  
皮膚やDNA等がダメージを受ける

近年、380-500nm(ブルーライト)や800nm(近赤外線)の  
波長も皮膚や眼にダメージを与えると云われ始めました

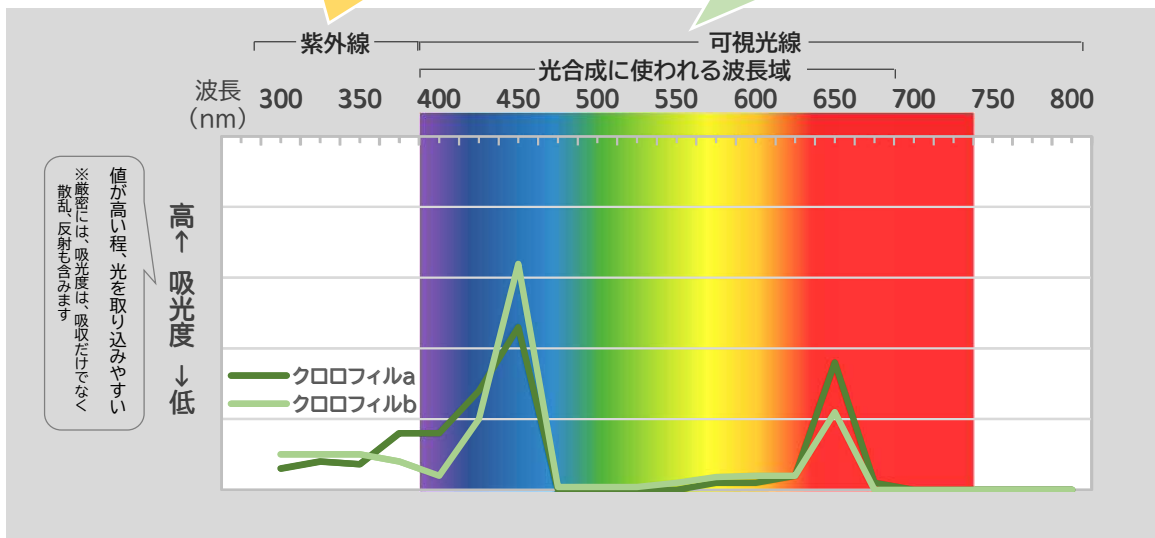
植物の場合

波長400-700nm

可視光線を防ぎたい

可視光線を浴びすぎると  
植物組織が甚大なダメージを受ける

過剰に生じた  
活性酸素※1が  
植物組織を  
傷つける



植物は、光合成で全ての光を使うわけではなく、400-700nmの波長域の光を使います

400-700nmの中でも、上グラフの 吸光度が高い波長域:植物体内に取り込みやすい  
吸光度が低い波長域:植物体内に取り込みにくい

植物体内に取り込まれやすい波長域の光を過剰に浴びてしまうと、  
活性酸素※1が余り、強光ストレスによるダメージを受けてしまいます

吸光度が低い波長域は、植物体内に取り込める量が少ないので、  
たくさん浴びても強光ストレスの原因になりにくい

※1活性酸素

植物は、光を取り込み、光合成の過程で活性酸素を作り出します。植物体内に取り込んだ光が適量の場合、植物にとって、活性酸素は、光合成、防御反応向上等に役立ってくれる有用物質です。しかし、過剰に光を取り込み、光合成等で使い切れない量の活性酸素を作り出してしまった場合、使い切れなかった活性酸素は、周囲の健康な植物組織を攻撃する有害物質になってしまいます。(光合成活性は植物の健康状態、気温等で変動します。低温や弱体化で光合成活性が落ちている場合、僅かな光でも使い切れない活性酸素を作り出してしま量であった場合は組織を攻撃するので、強光ストレスによるダメージが発生します。)

強光ストレスを  
軽減する方法①

可視光線を遮る(可視光線をカットできる資材の使用がお勧めです)

太陽光が強い場合や光合成活性が低い場合、可視光線を遮り、植物が体内に取り入れる光を減らすことで、  
過剰な活性酸素の発生を抑えることが出来ます。

強光ストレスを  
軽減する方法②

高温ストレス、水ストレス、乾燥ストレス 等のストレス軽減対策をとる

強光ストレスによるダメージは、芝が弱体化し光合成活性が下がっていると、より受けやすくなります。  
夏場の芝が弱体化する主な原因は、高温・水・乾燥等のストレスなので、それらのストレス軽減対策を  
とることが、強光ストレス軽減に繋がります。